

0.1 H15 数学必修

[1] (1) $\int_0^{1/2} (x-1/2)f(x)dx \geq \int_0^{1/2} (x-1/2)f(1/2)dx, \int_{1/2}^1 (x-1/2)f(x)dx \geq \int_{1/2}^1 (x-1/2)f(1/2)dx$ より $\int_0^1 (x-1/2)f(x)dx \geq \int_0^1 (x-1/2)f(1/2)dx = 0$

(2) (a) $-\sup_{n \geq k}(-a_n) \leq a_k$ である. 両辺について $\inf_{n \geq k}$ をとれば $-\sup_{n \geq k}(-a_n) \leq \inf_{n \geq k} a_k$ すなわち $\sup_{n \geq k}(-a_n) \geq -\inf_{n \geq k} a_k$ を得る. 同様に $-a_k \leq -\inf_{n \geq k} a_k$ について $\sup_{n \geq k}$ をとることで $\sup_{n \geq k}(-a_n) \leq -\inf_{n \geq k} a_k$ を得る. 以上より $\sup_{n \geq k}(-a_n) = -\inf_{n \geq k} a_k$. 両辺は共に有界単調数列であるから収束して $\limsup_{n \rightarrow \infty}(-a_n) = -\liminf_{n \rightarrow \infty} a_n$

(b) $\inf_{n \geq k} a_n + b_k \leq a_k + b_k \leq \sup_{n \geq k} a_n + b_k$ であり $\inf_{n \geq k}$ をとることで, $\inf_{n \geq k} a_n + \inf_{n \geq k} b_k \leq \inf_{n \geq k} (a_k + b_k) \leq \sup_{n \geq k} a_n + \inf_{n \geq k} b_k$ を得る. 有界単調数列であるから収束して $\liminf_{n \rightarrow \infty} a_n + \liminf_{n \rightarrow \infty} b_k \leq \liminf_{n \rightarrow \infty} (a_k + b_k) \leq \limsup_{n \rightarrow \infty} a_n + \liminf_{n \rightarrow \infty} b_k$

[2] (1) 全射連続写像 $f: X \rightarrow Y$ について X がコンパクトとする. Y の開被覆 $\bigcup_{\lambda \in \Lambda} U_\lambda$ を任意にとる. $\bigcup_{\lambda \in \Lambda} f^{-1}(U_\lambda)$ は X の開被覆である. したがって有限部分被覆 $\bigcup_{\lambda \in \Lambda'} f^{-1}(U_\lambda)$ をもつ. このとき $\bigcup_{\lambda \in \Lambda'} (U_\lambda)$ は Y の開被覆となるから Y はコンパクト.

$\phi: X \rightarrow Y$ は全射連続であるから X がコンパクトなら Y はコンパクトである. また逆写像 ϕ^{-1} も全射連続であるから Y がコンパクトなら X はコンパクトである.

(2) \hat{X} と \hat{Y} が同相であることを示す. $\hat{\phi}: \hat{X} \rightarrow \hat{Y}; x \mapsto \phi(x)$ と定める. ϕ が全単射であることと, \hat{X}, \hat{Y} の定義から $\hat{\phi}$ は全単射である. \hat{Y} の開集合 \hat{U} は Y の開集合 U を用いて $U \cap \hat{Y} = \hat{U}$ とかける. $\hat{\phi}^{-1}(\hat{U}) = \phi^{-1}(U \cap Y) \cap \hat{X} = \phi^{-1}(U) \cap \hat{X}$ より逆像が開集合であるから $\hat{\phi}$ は連続. $\hat{\phi}^{-1}$ の連続性も同様. したがって $\hat{\phi}$ は同相.

\hat{X} が連結でないなら開集合 \hat{X} の開集合 U, V をもちいて $\hat{X} = U \cup V, U \cap V = \emptyset$ とできる. このとき $\hat{\phi}$ が全単射であるから $\hat{Y} = \hat{\phi}(U) \cup \hat{\phi}(V), \hat{\phi}(U) \cap \hat{\phi}(V) = \emptyset$ であり, 同相写像であるから $\hat{\phi}(U), \hat{\phi}(V)$ は \hat{Y} の開集合である. すなわち \hat{Y} は連結でない.

同様に \hat{Y} が連結でないなら \hat{X} も連結でない.

(3) M_1 はコンパクトでなく, 一点をのぞくと連結でない. M_2 もコンパクトでなく, 一点を除くと連結でない M_3 はコンパクトであり, 一点を除いても連結. M_4 はコンパクトでなく, 一点を除いても連結.

したがって $(M_1, M_3), (M_1, M_4), (M_2, M_3), (M_2, M_4), (M_3, M_4)$ は同相でない.

(4) M_1, M_2 は同相である. $f: M_2 \rightarrow M_1; x \mapsto \tan(\pi x - \pi/2)$ とすると, f は連続である. $\lim_{x \rightarrow 0} f(x) = -\infty, \lim_{x \rightarrow 1} f(x) = \infty$ であり $f'(x) = (1 + 1/\tan^2(\pi x - \pi/2))\pi > 0$ より f は狭義単調増加であるから f は全単射. $f^{-1}(y) = (\arctan y + \pi/2)/\pi$ も連続であるから f は同相写像.

[3] (1)(a) $(x, cy) = x^T(\bar{c}y) = \bar{c}x^T\bar{y} = \bar{c}(x, y)$

(b) $(y, x) = y^T\bar{x} = \bar{x}^T\bar{y} = \overline{x^Ty} = \overline{(x, y)}$

(c) $(x, x) = x^T\bar{x} = \sum_{i=1}^n x_i\bar{x}_i = \sum_{i=1}^n |x_i|^2$ ここで $x \neq 0$ ならある $x_i \neq 0$ より $(x, x) > 0$

(2) $(Ax, y) = (Ax)^T\bar{y} = x^T A^T\bar{y} = x^T \overline{A^Ty} = (x, \bar{A}^Ty)$ である.

固有値 λ とその 0 でない固有ベクトル x に対して $\lambda(x, x) = (\lambda x, x) = (Ax, x) = (x, \bar{A}^Tx) = (x, Ax) = (x, \lambda x) = \bar{\lambda}(x, x)$ がなりたつ. $(x, x) > 0$ より $\lambda = \bar{\lambda}$ すなわち λ は実数.

(3) B^TB の固有値 λ とその 0 でない固有ベクトル x をとる. $\lambda(x, x) = (B^TBx, x) = (Bx, \bar{B}x) = (Bx, Bx) \geq 0$ より $\lambda \geq 0$.

半正定値性を考える方法もある. (固有値が全て非負 \Leftrightarrow 半正定値) $x^TB^TBx = \|Bx\|^2 \geq 0$ であるから B^TB は半正定値.

[4] (1) $A \in G$ について $A^{-1} = \begin{pmatrix} \bar{\alpha} & -\beta \\ \bar{\beta} & \alpha \end{pmatrix}$ である. $B = \begin{pmatrix} \gamma & \delta \\ -\bar{\delta} & \bar{\gamma} \end{pmatrix}$ とすると $BA^{-1} = \begin{pmatrix} \gamma\bar{\alpha} + \bar{\delta}\bar{\beta} & -\gamma\beta + \delta\alpha \\ -\bar{\delta}\bar{\alpha} + \bar{\gamma}\bar{\beta} & \bar{\delta}\beta + \bar{\gamma}\alpha \end{pmatrix}$ である. $\overline{\gamma\bar{\alpha} + \bar{\delta}\bar{\beta}} = \bar{\gamma}\alpha + \delta\beta, \overline{-\gamma\beta + \delta\alpha} = \bar{\gamma}\bar{\beta} - \bar{\delta}\bar{\alpha}$ であり, $\det BA^{-1} = \det B \det A^{-1} = 1$ より $BA^{-1} \in G$

すなわち G は $GL(2, \mathbb{C})$ の部分群である.

(2)(a) $\det A = \alpha\bar{\alpha} + \beta\bar{\beta} = |\alpha|^2 + |\beta|^2 = 1$ である. $\alpha = a+bi, \beta = c+di$ ($a, b, c, d \in \mathbb{Z}$) より α, β は $1, -1, i, -i$ のいずれかである. さらに一方が 0 でないなら他方は 0 である. すなわち H の元は $\begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \bar{\alpha} \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 & \beta \\ -\bar{\beta} & 0 \end{pmatrix}$ のいずれかの形をしていて α, β は $1, -1, i, -i$ のいずれかである.

$(a+bi)(c+di) = ac-bd + (ad+bc)i$ であり, $a, b, c, d \in \mathbb{Z}$ なら $ac-bd, ad+bc \in \mathbb{Z}$ であるから, (1) の BA^{-1} の結果をふまえると, $A, B \in H$ なら BA^{-1} の各成分は $\mathbb{Z}[i]$ にふくまれる. すなわち H は G の部分群である.

H の位数は 8 である.

(b) $N = \left\{ \pm \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \right\}$ とする.

$H/N = \left\{ E = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}, C = \begin{bmatrix} i & 0 \\ 0 & -i \end{bmatrix}, D = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{bmatrix}, F = \begin{bmatrix} 0 & i \\ i & 0 \end{bmatrix} \right\}$ である. $[A]$ で A の同値類を表す. $CD = F = DC, C^2 = D^2 = E$ である. よって H/N はアーベル群.

交換子群は商群がアーベル群であるような最小の部分群であるから $N \geq [H, H]$ である. $\begin{pmatrix} i & 0 \\ 0 & -i \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & i \\ i & 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} i & 0 \\ 0 & -i \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & -i \\ -i & 0 \end{pmatrix}$ であるから H はアーベル群でない. よって交換子群は N である.

(c) $\varphi: H \rightarrow \mathbb{C}^\times$ を群準同型とする. $H/\ker \varphi \cong \text{Im} \varphi \leq \mathbb{C}^\times$ より $H/\ker \varphi$ はアーベル群すなわち, $\ker \varphi \supset [H, H]$ である.

自然な全射 $\pi_\varphi: H/[H, H] \rightarrow H/\ker \varphi$ および φ から誘導される単射 $\tilde{\varphi}: H/\ker \varphi \rightarrow \mathbb{C}^\times$ によって群準同型 $F: \text{hom}(H, \mathbb{C}^\times) \rightarrow \text{hom}(H/[H, H], \mathbb{C}^\times); \varphi \mapsto \tilde{\varphi} \circ \pi_\varphi$ が定まる.

自然な全射 $H \rightarrow H/[H, H]$ を p とする. F の逆写像は $\phi \mapsto \phi \circ p$ である. よって F は同型写像.

$H/[H, H] = H/N$ であり, $C^2 = D^2 = E, CD = DC = F$ より $H/N \cong \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \times \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ である. すなわち準同型は C, D の行き先で定まり, C, D の行き先は $1, -1$ のいずれかである. したがって $|\text{hom}(H, \mathbb{C}^\times)| = 4$